

ピレモンへの手紙

これは何度もあったパウロの投獄生活中に書かれた手紙で
新約聖書にある彼の手紙で一番短いものです
しかしその短さにも関わらずこれはパウロの著作の中でも最も衝撃的なものの一つです
手紙の詳細をつなぎ合わせると見えてくる背景があります
ピレモンはコロサイ出身の裕福なローマ市民で
宣教旅行中のパウロとエペソで出会いそこでイエスに従う者になったようです
そして後にパウロの同労者エパfrasがコロサイで教会を始めた時
ピレモンはそのリーダーになりました
ピレモンはローマの家庭の主としては当然のこととして奴隷をもっていました
そのうちの一人はオネシモと言ってある時ピレモンに激しく逆らいました
オネシモはピレモンに対して窃盗か嘘をついてだましとるか何か悪事を働いたのです
その後ピレモンのもとから逃亡し獄中にあるパウロのところに来ました
助けを求めに来たようです
そしてその過程で彼はイエスを信じる者になりパウロの大事な助手になったのです
そういうわけでパウロはこの手紙を書くにあたって
非常に難しい立場に立たされていました
パウロはピレモンにオネシモを赦し迎え入れてやってほしいと頼んだだけではなく
彼を奴隷ではなく主にある兄弟として受け入れてほしいと言うのです
どの様に説得したのか詳しく見ていきましょう
パウロはまず冒頭でピレモンをほめ
イエスとその信徒たちへの彼の愛と誠実さのゆえに神に感謝しています
そして本題への導入としてこう祈ります
私たちの間でメシアのためになされている良い行いをすべて知ることによって
あなたの信仰の交わりが活発になりますように
この箇所のキーワードは交わりでギリシャ語ではコイノニアです
意味は分かち合う互いにかかわりあうということで
二人以上の人何かを共に与えられそれを分け合う仲間になることを指します
クリスチャンはイエスに従う者はみな平等で
神からの愛と恵みを分かち合うパートナーだと理解するはずだとパウロは言っています
そしてパウロにとってキリスト者のコイノニアとは
頭で考えるだけのものではなく実際の間人間関係の中で体験するものなのです
そしてついにパウロはオネシモについての頼みごとを切り出します
オネシモは獄中でわが子になったつまりパウロに導かれて
イエスに人生をささげ忠誠を誓う者になったのだとパウロは言います
パウロとオネシモは主にあって家族となりました
オネシモは獄中でパウロに忠実に仕えたので
パウロは彼を自分のそばに残したかったのですが
ピレモンと彼の間未解決の問題がある以上
イエスの信徒としては和解しなければならないとパウロは考えました
その信念に基づいてパウロはピレモンにオネシモを奴隷としてではなく
主にあって愛する兄弟として受け入れてほしいという大胆な願いを伝えたのです
これは本当に常識外れの願いです
ローマの法律によればピレモンはオネシモを罰したり投獄する権利があるのに
パウロは赦してやってほしいというだけではなく奴隷だった彼を
社会的に平等な家族の一員としてコロサイに迎え入れてやってほしいと
頼んでいるのですから

親切どころの話ではなく前代未聞です
奴隷を解放するだけでなく家族のように扱うなんて
ローマ社会の秩序を乱すようなことになります
ピレモンはなぜそこまでしなくてはいけないのでしょうか
ここでパウロは冒頭の祈りにあるキーワードを思い出させます
あなたが私を仲間だと思うならオネシモを私と思って迎えてください
もし彼があなたに損害を与えたなら私がそれを弁償しますと言っていますが
この仲間という言葉は先ほどのコイノニアです
これによってパウロの語ってきた福音のメッセージが
行動になって表れているのがわかります
まずはコリント人に語ったように和解を呼び掛けています
神はメシアによってこの世と和解し人々に罪の責めを負わせませんでした
パウロはここでイエスが果たした役割を果たそうとしています
つまりオネシモの悪事の結果を引き受け
彼がピレモンと和解できるように自分が償うと言っているのです
これは単なる法的な処理ではなくコイノニアについての話です
オネシモもピレモンもパウロも神の前では平等に赦してもらわなければならない存在です
十字架の前では皆同じ立場であり
ピレモンとオネシモはもはや主人と奴隷という関係ではなく家族なのです
メシアにあって兄弟であり
パウロがピレモンやコロサイの教会に教えたとおり
神の家族にはギリシャ人もユダヤ人もなく
割礼の有無も関係なく外国人未開人そして奴隷自由人の区別もありません
ただメシアだけがすべてでありメシアがすべての人のうちにおられるのです
パウロはピレモンは頼んだ以上のことをしてくれると信じていると述べ
また牢から出られたらすぐに訪ねたいので自分の部屋も用意しておいてほしいと書き
最後に何人かに挨拶をことづけて終わっています
ピレモンへの手紙には力強い点があいくつもあります
まずこれはパウロの手紙の中で唯一
イエスの死とよみがえりについて明記していないものです
うっかり書き忘れたのではなく
十字架について言葉で説明しなくても行動で示していたからです
パウロは十字架の意味を体現して
自分を通してオネシモとピレモンが神と和解し互いに和解するようにしたので
この手紙はイエスの福音は個人の内面を変えること
そしてその変化はやがてその人の人間関係をも変えていくことを教えています
ピレモンとオネシモが今やメシアにあって兄弟だという事実は
彼らの主人と奴隷という関係を意味のないものにしました
イエスの家族である人々はみな平等に神の恵みにあずかる者たちです
それはパウロがコロサイ人への手紙で言っている新しい人たちであり
その新しい人間たちが新しい社会を形成するのです
人の価値や社会的地位は
人種や性別や経済的社会的階級によって決まるものではありません
メシアにあって彼らはみな新しい人であり
平等な仲間となりイエスにあって人を癒やす神の恵みを共に分かち合うのです
これがピレモンへの手紙です

【要約】

パウロの手紙は、パウロの投獄中に書かれ、新約聖書の中で最も短い手紙の一つですが、非常に衝撃的な内容を含んでいます。手紙の背後には、パウロの同労者ピレモンとの関係があり、ピレモンはコロサイ出身のローマ市民で、エペソでイエスを信じる者になり、その後、ピレモンがコロサイで教会を始めたときにリーダーとなりました。ピレモンは奴隷も所有しており、その中の一人であるオネシモがピレモンに対抗し、不正行為を働いた後、逃亡し、獄中のパウロに出会いました。パウロの指導の下でイエスを信じる者となり、パウロの大事な助手となりました。このため、パウロはオネシモをピレモンに戻し、奴隷ではなく兄弟として受け入れてほしいという願いを伝える難しい立場にありました。パウロは、ピレモンとの信仰の交わりに言及し、コイノニア(共同体)というキーワードを強調し、クリスチャンはイエスに従う者として平等であり、愛と恵みを分かち合うパートナーであるべきだと述べました。そして、オネシモについての願いを切り出し、和解と赦しを呼びかけました。パウロは、ピレモンにオネシモを罰するのではなく、愛する兄弟として受け入れることを求め、自分がオネシモの悪事の結果を償うとまで言っています。この手紙は、イエスの福音が個人の内面を変え、その変化が人間関係をも変えることを示し、十字架の意味を体現しています。イエスにあって、人々は平等な仲間であり、社会的な地位や人種、性別によって価値が決まるのではなく、新しい人として共に神の恵みを受ける者として扱われるべきだと教えています。